

2013 国際教養科 NEWS 11月(2)

日韓高校生交流事業 韓国研修参加報告 10/27(日)～11/1(金)

10/27(日)から11/1(金)までの5泊6日で、文部科学省主催の日韓高校生交流事業 韓国研修があり、長野県代表(1名)として本校 国際教養科2年 越 朝佳さんが参加しました。日本の文部科学省にあたる国立国際教育院訪問を始め、ソウル市内の大学見学や高校訪問、観光等を通して、韓国の文化と歴史を学び、高校生相互の交流を深めました。中でも、国立国際教育院では、越さんが日本全国から参加した高校生を代表して、韓国語でスピーチをする機会がありました。



以前の私の韓国の人たちに対するイメージは、領土問題を中心としたメディアの情報だけで勝手に思い込む面がありましたが、音楽を通じて韓国に興味を持ち始め、高校で韓国語を勉強し、韓国人の友だちができていくうちに、昔のイメージは変わりました。そして、この交流事業で私はとても多くのことを学びました。今回の研修では、国立国際教育院を訪れ、参加者を代表して韓国語でスピーチをする機会があり、いい経験になりました。また、登村高校

ソウル市の東大門青少年修練館にて 訪問では授業見学をしたり、現地の高校生と給食を一緒に食べて、とても楽しく交流を行いました。さらに、ソウル市内の大学見学やNソウルタワー、東(南)大門市場などの観光、包丁やまな板などの厨房器具を楽器として使うナンタの公演観覧など、普通の観光旅行では絶対に経験することができないことばかりのとても充実した内容でした。

今回のプログラムの中で、「韓国の高中生とペアになってソウル市内を観光する」というものがありました。私はとても不安でしたが、私とペアになった同じ年の女の子や他の子たちも、すごく親切で優しく、まるで最初から友だちだったかのようにずっと私と腕を組みながら案内してくれました。3時間程しか交流できなかったにもかかわらず、私たちが朝早くの飛行機で帰国する日、



に、本人が登校前にわざわざ空港に来て、手紙とプレゼントを届けてくれました。すごく感動し、お互いに泣きながらお別れをしました。このように、日本と韓国の国同士の問題は、民間の個人同士のつながりには全く関係がなく、韓国の人はずごく温かい人たちばかりだと思いました。私は今回のような日韓の個人同士のつながりがいつかは国と国とのつながりに発展するように願っています。そして、この研修で学んだことをこれからの自分の人生に役立てていきたいと思います。(国際教養科2年 越 朝佳)

高校生参加型プログラム 国際協力の世界(JICA 駒ヶ根)参加報告 10/20(日)

10/20(日)に JICA 駒ヶ根(駒ヶ根青年海外協力隊訓練所)にて、高校生参加型プログラムの体験学習があり、異文化理解ワークショップ、語学訓練、エスニックランチ食事会を通して、国際協力について多くのことを学びました。本校は6名の生徒が参加しました。



・会場では、元青年海外協力隊員の方と話す機会を設けて頂き、いろいろな話を聞くことができました。その中で心に残ったことが2つあります。1つ目は「困難なことを楽しむ」ということです。協力隊の仕事は困難なことだけですが、その場でできる最善のことを楽しんでやることで、おのずと道が開けてくるそうです。2つ目は「恥ずかしがらない」ことです。失敗を恐れず、自分を出してみるということが協力隊の活動において大切なのだと思います。今

「世界がもし100人の村だったら」の感想を皆で共有し合う回の研修では、とても 沢山、大切なことを学ばせて頂きました。今回学んだことを多くの人に伝え、共有したいです。そして絶対に青年海外協力隊になる夢を叶えたいです。(国際教養科1年)

・JICA 駒ヶ根での研修を終えて、自分の中で一番変わったことは、知識が現実味を帯びたということです。もちろん、世界には教育を受けられないために文字が読めない人がいることや、満腹に食べることができずに今も飢えて苦しんでいる人がいることは知っていました。でも、それらはあくまでも、「世界のどこかで」という思考の範疇だったのです。今回 実際にベンガル語を習ったり、「世界がもし100人の村だったら」というアクティビティーを通して、そういった問題をすごく身近に感じました。また、参加した高校生は皆、意識が高く、自分へのいい刺激になりました。私も彼らに負けないように高い意識を持ち続ける努力をしようと思いました。(国際教養科1年)

・参加して本当に良かったと思えるような充実した内容でした。私はそれまで青年海外協力隊がどのようなものなのかよく知りませんでした。それになぜ、わざわざ危険な国や土地に行って、活動しているのだろうとさえ思っていました。でも、そこにはちゃんとした理由がありました。貧しい国に行って、自分たちの技術を伝え、その国が発展していくための手伝いをしてあげるとするのが目的です。既に、協力隊として 他国に行ってきたOBとOGの方々は、とても生き生きとして



昼食はみんなでエスニックランチを楽しむ

いました。「これが私の生き甲斐になっている」と語る人もいて、ただただ圧倒されました。今まで自分は何をしてきたのだろうと考えてしまう程でした。私は正直、積極的にこのような活動をしていくのは苦手な方です。ですが、はきはきしたOGの方が「私の高校の時はもっと心が暗かった」という話を聞いて、協力隊になったら今の自分を少しは変えることができるのかと淡い期待を抱きました。今の自分を変えるためにも将来、私は青年海外協力隊になりたいです。(普通科2年)

・青年海外協力隊に参加した方のお話を聞きました。その方は、2年間ブルキナファソという国で子どもたちに食事の前には手を洗うことなど様々なことを教えていたそうです。この方のように、子どもたちと関わる仕事をしたり、他には医療に携わったりと様々な活動ができることを学びました。私は、将来人の役に立つ仕事、特に子どもたちの役に立つ仕事をしたいと思っています。また、海外にとっても興味があります。だから、私は将来、青年海外協力隊に参加して、貧しい国の子どもたちに役立つ活動がしたいです。今回、参加して本当に良かったです。(普通科2年)

・今回のJICA体験型ワークショップを通して、改めて発展途上国、貧しい国には私たち先進国の開発援助や協力が必要であると感じた。私が体験学習の場で派遣された国はバングラディシュで、JICAの青年海外協力隊が実際に派遣される国であった。バングラディシュは、日本よりも明らかに発展が遅れていて、まだまだ日本を始めとする先進国の援助が大切だと思った。そして、バングラディシュで話されているベンガル語を学んだ。あいさつ程度ではあるが、とても楽しかった。昼食は、実際の青年海外協力隊員の方々と一緒に食べ、派遣国の写真を見たり、体験談や訓練所での様子のお話を聞き、学ぶことが多かった。また、「もし世界が100人の村だったら？」というアクティビティーを行い、私は寸劇にも参加した。寸劇の役は、字が読めない家族の父親だった。“水”、“薬”、“農薬”と異国の文字で書かれた3つの容器の中から、字が読めない父親役の私が選んで、子どもに薬を飲ませなければならないという設定だったが、どれかわからず、結局、子どもに農薬を飲ませてしまうことになり、とてもショックだった。また、実際に字が読めないために地雷の危険看板がわからず、1日に70人が被害に遭っていることも知って驚いた。こんな理不尽な悲劇を根絶し、人が命を守るためには、子どもの頃から教育を受け、読み書きする力を正しく身につけることが不可欠であると強く思った。また、そのためにも、豊かな国は貧しい国の現状を見て見ぬふりをするのでなく、いろいろな面で分かち合い、援助していかなければならないとも強く感じた。今回のような有意義な研修にはもっと多くの人に参加し、実際に体験し、世界の現状を理解し、自分の意見をしっかり持つことが大事だと思う。(国際教養科2年)

